トーマス・マンとマックス・ヴェーバーのアメリカン・ドリーム(中編)*

山 室 信 高

目次

3．旅の絵
3−1. 鉄道
3−2. 都市
3−3. 大学
3−4. 移民
参考文献

3．旅の絵

ここで大まかに二人の旅程を比べてみよう。マックス・ヴェーバーは1904年8月30日から11月19日までのアメリカ滞在で、以下のような経路をとった(vgl. MWG II/4, 624)。[1)]

ニューヨーク → ナイアガラフォールズ、ノーストナワンダ → シカゴ → セントルイス → オクラホマ州ガスリー、マスコーギ、フォートギブソン → テネシー州メンフィス → ルイジアナ州ニューオリンズ → アラバマ州タスキーギ → テネシー州ノックスヴィル → ノースカロライナ州アッシュヴィル → 同州マウントエアリー → ヴァージニア州リッチモンド → ワシントンD.C. → フィラデルフィア、ボルティモア → ボストン → プロヴィデンス、ニューヘヴン → ニューヨーク

ニューヨークから中西部および南部を経て、アパラチア山脈沿いを北上して東部沿岸へ――アメリカの東半分をひととおり巡った恰好である。

---

*前・後編の2部構成の予定だったが、分量が大幅に増えたため、本稿を中編として全3部構成とする。

1) 付録の地図も参照。より詳細な旅程は、vgl. Scaff [2013], S. 305-309. なおマックス・ヴェーバーの著作の引用・参照はWeber [1984-2020] の全集版に拠り、MWGと略記し、巻数と頁数を記す。

トーマス・マンの方は1934年の最初の旅行でニューヨークの他にニューヘヴン（イェール大学）、次の1935年にはボストン（ハーヴァード大学）とワシントンD.C.（ローズヴェルト大統領と会見）を訪れたが、ここでは4回目の渡米の際に行なった、1938年3月から5月にかけての講演旅行の道筋を見てみると次のとおりである。[2)]

ニューヨーク → シカゴ → ミシガン州デトロイト（アナーバー）→ ニューヨーク → ワシントンD.C. → フィラデルフィア → ミズーリ州カンザスシティ → オクラホマ州タルサ → ユタ州ソルトレークシティ → ロサンゼルス → サンフランシスコ、バークレー → ロサンゼルス → イリノイ州シャンペーン（アーバナ）→ オハイオ州クリーヴランド → トロント（カナダ）→ ニューヨーク

ニューヨークを拠点に東部沿岸の諸都市、五大湖の周辺、そしてオクラホマといった辺りはヴェーバーと重なっているが、ヴェーバーが「深南部(Deep South)」と言われる地域まで足を延ばしているのに対して、マンはオクラホマからさらに西進してカリフォルニアの太平洋岸に達しているのが大きな違いである（マンも後に1941年の講演旅行でノースカロライナ、ジョージア、テキサス、アラバマ、サウスカロライナといった南部の諸州を巡っている[3)]）。以下では、主にヴェーバーの手紙[4)] とマンの日記[5)] を参照しながら、アメリカを特徴づけるいくつかのトピックに関して二人の印象や反応をスケッチしていく。

3－1. 鉄道

旅の主たる移動手段はどちらももちろん鉄道である。前編で見たように、二人ともアメリカの鉄道に関しては予備知識を持っていた――ヴェーバーは父親がノーザン・パシフィック鉄道で北太平洋岸まで旅行していることから、大陸横断鉄道の様子を聞き知っていただろうし、マンは『大公殿下』の執筆に当たって、「鉄道王」スペールマンを描くのにアメリカの鉄道事情を調べていた(vgl. GKFA 4.2, 415f.)。それにもともと二人とも鉄道好きである。幼い頃、積木の機関車ごっこに倦まず

---

2) 詳細な旅程は、vgl. Heine / Schommer［2004］, S. 317-325. 地図は、vgl. Vaget［2012］, S. 243.

3) Vgl. Vaget［2012］, S. 255-258.

4) ヴェーバー（および妻マリアンネ）のアメリカからの手紙はMWG II/4に収録されている。これらの手紙からの引用・参照は、誤解の恐れがない限り、頁数のみ挙げる。

5) マンの日記はTbと略記し、年（下二桁）／月／日を挙示する。その他マンの著作は基本的にMann［1974/1990］= GWおよびMann［2002ff.］= GKFAの二つの全集に拠り、さらにMann［1993-1997］= Eのエッセイ集も適宜引用・参照し、巻数と頁数を記す。

興じていたというヴェーバーは「鉄道の時代の申し子」[6] であったし、マンにとっても、自伝的な『トーニオ・クレーガー』(1903)の中で少年トーニオが友人のハンスと散歩がてら「列車が無骨に慌ただしく煙を吐いて通り過ぎるのを眺めては、気晴らしに車両の数を数えた」(GW VIII, 280)とあるように、鉄道は日常の風景に溶け込んでいた。ゆえにアメリカに来て、鉄道そのものに驚くことはもはやなかっただろうが、1869年に大陸横断鉄道が開通して以来、路線網を全国土に張り巡らせ、「フロンティア」の消滅が告げられる19世紀末にはドイツはおろか全ヨーロッパの営業キロ数を上回ったアメリカの鉄道業の発展にはやはり一目置くところがあった。

ヴェーバーは「ニューヨークの極めてもっとも大いなる印象は一方でブルックリン橋の中央からの眺めと、他方で高架鉄道(Elevated)で橋を渡って行くブルックリンの広大なグリーンウッド墓地である」(MWG II/4, 270f.)と、マンハッタンの摩天楼が描く鋭角のスカイラインとブルックリンの緩やかな起伏に富んだ緑地との「コントラスト」について母に書き送っているが、この二つをつなぐ「ブルックリン橋の上には歩道が中央高く通り、夕方6時頃になるとその両脇には高架鉄道の車両の屋根が15秒間隔で轟音をあげて行き来し、さらにその外側にはどちらも市電が数メートル間隔で、人間をぎっしり詰め込んで、半分はぶら下がりながら通り過ぎていく――止むことのない轟きと軋み」(ebd.)の光景に目を瞠っている。[7] 一方マンが訪ねた1930年代のニューヨークではすでに自動車（および地下鉄）が普及し、マンもたいていホストの車に同乗しているが、たまに「高架線(Hochbahn)」を使うこともあったようだ(vgl. Tb, 35/7/3)。

しかし都市間の長距離移動となるとヴェーバーはもちろん、マンの時でも鉄道に如くはない。ニューヨークからナイアガラ、シカゴ方面に向かう列車では、ヴェーバーもマンも途中ハドソン川の渓谷の景観を楽しんだが(vgl. MWG II/4, 270; Tb, 38/3/2)、これは多分に彼らが「プルマン・カー(Pullman car)」と呼ばれる、大きな窓と回転式の座席がついた快適な客車に乗っていたからである。「プルマン・カー」は鉄道会社とは別のプルマン社が提供する特別客車で、追加料金を払って利用する仕組みになっていた。等級の区別が基本的にないアメリカの列車にあって、「プルマン・カー」は実質的な一等車であった。ヴェーバーによれば、「［普通車と］プルマン・カーの違いは［…］快適さの点で途方もなく大きく、必ず快適な喫煙室、書き物室、図書室があり、たいてい後ろにはデッキ付きの展望車があって、大きな座席は回転し、間隔はとても広く、車内は風通しがよい。普通車との値段の違いはたいていごくわずかで、まる一日乗って2.5ないし3ドル、もしくはそれより安い」(337)ということで、値段の割には非常に質の高い設備とサービスが享受できた。ただヴェーバー

6) Roth［2001］, S. 475. ちなみにヴェーバーの祖母エミーリエ・スシェーは1830年にリヴァプール～マンチェスター間の鉄道開通式典に居合わせたということである。

7) 当時のブルックリン橋の写真、https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Brooklyn_Bridge_railroad.jpgを参照。

は「プルマン・カー」の代表格である寝台車――「まん中に通路があり、両脇にベッドが列車の進路に向かってそれぞれ上下に2台ずつ備えられ、カーテンで仕切られている」(ebd.)、いわゆる開放式のそれ――には着替えや洗面といったプライヴァシーの点で少々不満を漏らしている。これがマンの場合は「居心地のよいシカゴ行きの個室(Apartment)」(Tb, 38/3/2)、すなわちヨーロッパと同様なコンパートメント式の寝台車がすでに導入されていて、「夜は快適なベッドで読書後に気持ちよく過ごした」(ebd.)。さらに「プルマン・カー」はもちろん食堂車も完備し、ヴェーバーは「まさにホテルのように」(337)フルコースが振舞われると言い、マンも「疲れすぎて食欲は失せてしまったように思えたが、食事（スープ、鶏のフリカッセ、チェリーケーキ）は驚くほどうまかった」(Tb, 38/3/5)と記している。

このように「車輪付きの豪華ホテル」[8] の観があるアメリカの列車だが、ヨーロッパから来た彼らにとって、移動の距離と時間は想像を超えていた。オクラホマからメンフィスを経由してニューオリンズに向かおうとするヴェーバーは「走行時間からするとベルリンからローマくらい」と見積もりながら、「しかし距離のことなど忘れてしまう」(320)と地理的な感覚の麻痺を伝えている。マンが後によく利用することになるロサンゼルス～シカゴ間は主要路線ゆえに特急列車（通称「ロケット列車」）が通っていたが、どんなに速くても車中2泊は要した。「外はライラック色に染まった荒野、砂漠、サボテン、岩山――この列車に私たちは2日2晩拘束されている」(Tb, 38/4/26)と長旅のため息が聞こえるようだ――それでも読書や書き物で「旅は退屈することなく終了した」（Tb, 38/4/29）のだが。最後にニューヨークに戻ったヴェーバーは「私たちの『周遊』は終わった――全部で約180時間の鉄道旅行、これからここで何もなければ、少なくともこの『国』の鉄道とは運よくおさらばだ(glücklich entronnen)」(376)と安堵した様子であった。単純に計算すれば、全日程のおよそ10分の1の時間は列車に乗っていたことになる。マンもこの1938年の2ヶ月の講演旅行だけで、日記の記述から少なく見積もっても220時間は車中で過ごしている。「プルマン・カー」なくして彼らのアメリカの旅はありえなかった。

3－2.　都市

ヴェーバーとマンが初めて見たアメリカの都市はもちろんニューヨークである。ヨーロッパから船で渡ってくる大量の移民と同様、彼らも自由の女神像と超高層ビルの群を驚きの眼差しで見上げたが、手放しの感激というのではなかった。ニューヨークに着いて、ヴェーバーの妻マリアンネが「もっとも明らかに感動しているのは［…］マックスです」(MWG II/4, 266f.)と手紙に記したところ、当人はその箇所に「当たっていない」と注意書きを付した上で、「私は特に感動しているわけでは

8)　Vaget［2012］, S. 226. 同書に収められている写真18, 19も参照。

なく、1日半のニューヨーク滞在の後にアメリカについて文句を言うドイツの同行者たちにイライラしているだけである」(270)として、ニューヨークの印象を次のようにまとめている。

> ニューヨークのシティが位置する［マンハッタン］島の南端に立つ資本の牙城(Zwingburgen des Capitals)、それはまさにボローニャやフィレンツェの昔の絵にある塔のようで、いたるところエレベーターの動力機関のうすい蒸気の雲がまとわりついている［…］――その壮大な眺めは特に広い外港、自由の女神像、そして遠海への眺望と結びつくと実にどこまでも独特な印象である。私には「摩天楼(Wolkenkratzer)」も「醜悪」とは見えない。素気ないファサードを持ったわが国の団地アパート(Mietskasernen)を10個重ねるとできあがる木目入りの岩山の上に盗賊の巣窟を載せたような姿、それは確かに「美しい」わけではないが、といってその反対でもなく、美醜を超えており、ごく近くから見なければ、この地で生起していることの、私にはこれ以上ふさわしいものは考えられないくらいのシンボルとなっている。(271)

同行のトレルチやヴェルナー・ゾンバルトなどとは違って、性急な価値判断を慎み、新奇な対象に対してできるだけ公平であろうとする社会学者ヴェーバーの面目が窺われるところである。従来の美醜の基準が通用しないニューヨークの「資本の牙城」たる摩天楼の風景にアメリカの資本主義のシンボルを見てとっているわけだが、その際、中世イタリアの都市に富と権力を誇示するべく建てられた――今日、例えばサン・ジミニャーノに遺されているような――塔を連想している。

マンの方はニューヨークに入港したその日の日記に「醒めた自由の女神の像と、霧の中にシルエットになって浮かび上がる高層建築の群」(Tb, 34/5/29)と書くにとどまっている。「日記をつけることは全く不可能だった」(Tb, 34/6/12)と言うほどに多忙なスケジュールだったためだが、後日、このアメリカへの初航海を日記仕立てで綴ったエッセイ『ドン・キホーテと海を渡る』(1934)にはもう少し詳しくこうある。

> 上陸の準備をして、入港に居合わせようと甲板に出た。遠くの靄の中に自由の女神像のなじみ深い姿が花冠を高く掲げている。古典主義的な記念碑(Erinnerung)、ナイーヴなシンボル、それはわれわれの現代にあってはすっかり疎遠になってしまった…［…］あまりにもヨーロッパ的で、後ろ向きの感情および思考の方向性だ！前方に朝霧の中からマンハッタンの高層建築、幻想的な植民地の風景、聳え立つ巨人の都市(Gigantenstadt)がゆっくりと現れてくる。(E IV, 138f.)

マンはニューヨークの遠景を望みながら、後にしてきたヨーロッパを思い出している。もちろん彼の頭にはヨーロッパを覆うファシズムに対する懸念が常によぎっているのだが、ここではエッセイ

のタイトルにもあるように「ドン・キホーテ」への夢想が後ろ髪を引かれるように湧き起こっている。風車を巨人と幻視して突進したドン・キホーテのように、夢うつつのマンの目にも摩天楼は巨人の姿に映り、その懐に入りこんでいく。新旧二つの世界が二重写しとなって、ニューヨークはマンとヴェーバーの心眼に浮かび上がる。

このニューヨークの他にも、ヴェーバーとマンはアメリカの代表的な大都市を訪れている。ヴェーバーにとっては中西部の要衝にして、当時ニューヨークに次ぐ規模のシカゴがとりわけ強烈な印象を残した。マンもシカゴには立ち寄っているが、彼の場合は慌ただしい講演ツアー中に休養のため1ヶ月ほど滞在したロサンゼルスが――ゆくゆく亡命の地になることからも――見逃せない。

もともと1893年の万国博覧会を機にシカゴを訪ねようとしていたヴェーバーは10年越しの念願を果たすことになった。「シカゴはもっとも度外れな都市の一つである。［ミシガン］湖畔にはいくつかの快適で美しいヴィラの区画があり［…］それから労働者の共同アパート(Tenements)と不潔極まりない通りが来て［…］摩天楼の谷間のシティは身の毛もよだつような街路状態である。［…］南西の荒野からの熱い渇いた風が通りを吹き抜けると、特に太陽が黄土色に沈むときなどは、都市の光景は幻想的になる」(286f.)と、彼は“Windy City”の異名を持つシカゴのプロフィールを描いている。ニューヨークよりも早くに建造されたシカゴの豪奢な摩天楼を見て、マリアンネが「金にものを言わせた(protzenhaft)」と言いたくなったのに対して、ニューヨークの時と同様に「最良の面を見ようとするマックスの傾向は『経済力の表現』だと言う」(282)。こうしたシカゴの外観にとどまらず、ヴェーバーはこの都市の代表的な施設を巡ることで、その内情も観察している。当地の産業のランドマークと呼べる「ストックヤード（家畜置場、食肉加工場）」を見学した時の様子はこう書かれている。

> いたるところで労働の強力な集中度が目につく。毎日何千頭もの牛や豚が屠殺されて「血の海」が広がるストックヤードではそれがもっとも顕著である。牛が何もわからずに屠殺場に入ってくるや、ハンマーで殴られて倒れ、すぐさま鉄の鉤で挟まれて高く引き揚げられると移動を始め、留まることなく進み、次から次へ新たな作業員の前を通りすぎては、はらわたを抜かれ、皮を剥がされ、等々――その際いつも作業のテンポは牛を引いていく機械に拘束されている。煙、糞、血、皮の臭いが立ちこめる中、まったく信じられないくらいの労働成果が見られ、私はそこをたった0.5ドルで案内してくれた少年と汚物の中に溺れないようにバランスを取りながら周った。そして豚が豚小屋からソーセージや缶詰になるまで追跡することもできる。(292)

ヴェーバーとちょうど相前後してストックヤードに入りこんだ作家アプトン・シンクレア(1878-

1968)はこの凄まじい労働の実態を告発し、ソーセージや缶詰の不衛生を暴露する小説『ジャングル』(1906)を著したが[9]、ヴェーバーはむしろそこに貫徹する作業効率、すなわち「合理化」の原理を見てとっている。「合理化」は工場内にとどまらず、労働者が利用する市電にも及び、ヴェーバーによれば「毎年約400人が市電にひかれて死亡するか障害者になるが、死亡の場合、法律によって会社は5000ドル（未亡人または相続人に）、障害の場合10000ドル（負傷者に）負担する」ことになっているが、「この400人を補償する方がしかるべき事故の予防策よりも安く上がるということを会社は計算していた」(293)という。

ところで、ヴェーバーがシカゴに到着する前日（1904年9月8日）、2ヶ月に及んだ食肉産業のストライキが労働者側の敗北をもって終わったところであった。[10] ヴェーバーはストライキの余波で騒然とした町の様子を伝えている。

> ストックヤードでは悪魔が大暴れ、敗れたストライキ。スト破りに大勢のイタリア人と黒人、毎日のように両陣営に数10名の死者を出した撃ち合い。非組合員が乗っていたがゆえに、市電の車両が転覆させられ、10何名かの女性が押しつぶされた。高架鉄道に対するダイナマイトを使った脅迫があって、実際一つの車両が脱線し、半分川へ転落した。私たちのホテルのすぐ傍では白昼タバコ商が殺害され、そこからいくつか通りを隔てた所では夕暮れに3人の黒人が市電を襲って略奪した、等々――全部まるごと独特な文化の隆盛(Culturblüthe)である。(287f.)

シカゴのこの「独特な文化」は何よりも「諸民族のごたまぜ(Durcheinanderquirlen der Völker)」(ebd.)[11]にあるとヴェーバーは見ている。しかしそれは単なる並存ということではなく、厳然たる分業と序列の体制が作られていた。ギリシア人は靴磨き、ドイツ人は給仕、アイルランド人は政治、イタリア人は土木といった具合に、いずれもアングロサクソン系のヤンキーに奉仕・従属している。ストックヤードのストライキもこれら様々な民族から成る労働者側が隙を突かれた――ドイツ人、アイルランド人が多数を占める組合員に対して、イタリア人、ギリシア人、黒人のスト破りが経営者

---

9) 佐々木／大井［2006］、185-197頁参照。このシンクレアの小説を読んでショックを受けたセオドア・ローズヴェルト大統領が食品衛生に関する諸種の法律を成立させたことは有名である。ちなみにトーマス・マンは次に見るロサンゼルス滞在時にシンクレアと個人的に知り合っている。Vgl. Tb, 38/4/18.

10) ストライキの詳しい経緯は、vgl. Scaff［2013］, S. 52.

11) ヴェーバーも利用した当時の代表的なガイドブック『ベデカー』には、シカゴの人口180万のうち、ドイツから60万、アイルランドから20万、イギリスないしスコットランドから19万、スカンディナヴィアから18万、ポーランドから10万、ボヘミアから9万、そして黒人が3万とのデータがある。Vgl. MWG II/4, 290, Anm. 27. この他にヴェーバーが記しているように、ギリシアやイタリアなど南欧からの移民も多かった。

側から送りこまれた――ことが主な敗因だった。[12] ストックヤードの屠殺の場面を思い浮かべてのことだろう、「この強大な都市全体［…］は皮膚が剥かれ、中の内臓が動いているのが見える人間のようだ」(288)と、ヴェーバーはシカゴのエスニックな腑分けを行なっていた。

トーマス・マンはソルトレークシティ発の夜行特急「ストリームライナー」で、1938年3月23日早朝、ロサンゼルスに到着、ビバリーヒルズの一流ホテル「ビバリーウィルシャー」に投宿した。早速、太平洋を初めて望んで「何もかも広く、明るく、新しい。美しい海浜」(Tb, 38/3/24)と喜びを露わにしている。ビバリーヒルズ界隈の「芝生とヤシの木を持つ優雅なヴィラが並ぶ通り」を散歩して、「石油や映画関係者のものである家々の非常に好ましい趣味」(Tb, 38/3/25)に感心したマンは有名な「ビバリーヒルズホテル」の庭のバンガローを借りて、しばらく静養しながら執筆を再開することにした。仮の仕事部屋を整えるとともに、しかしまずは「足」を確保するため、「レンタカー、フォード車、4人乗りのオープンカー」(Tb, 38/4/1)を手に入れる（妻カーチャと娘エリカが運転）。ロサンゼルスはとにかく広い。ヴェーバーもシカゴの広さに「ロンドンより広い！」(MWG II/4, 288)と半ば呆れていたが、ロサンゼルスは市域だけで（ビバリーヒルズやサンタモニカなどは含まずに）シカゴの倍はある。またマンが亡命生活を送った1940年代には市内交通が市電から自動車へとって代わられ、「フリーウェイ」と呼ばれる高速道路が整備されるにつれて、ロサンゼルスは典型的な車偏重の都市になっていく。[13] とはいえ人口の上では、ロサンゼルスは今でこそシカゴを抜いて全米第2位だが、当時はヴェーバーが「果てしない人間砂漠」(287)と呼んだシカゴに遠く及ばなかった。またニューヨークやシカゴのような摩天楼のビル群もなく（一番高かったのは27階建ての市庁舎）、まだ長閑な田園都市の風情を残していた。

マンがロサンゼルスに魅かれたのは、もちろん風光明媚な海辺の土地と温暖な気候、比較的安い物価といった一般的・実際的な理由もあるが、この都市ならではの特有の事象も与っていた。シカゴが中西部の穀倉地帯を背景に農産や畜産の一大産業都市であったのに対して、ロサンゼルスはハリウッドを擁して映画産業のメッカとして発展し、1930年代にはすでに黄金期を迎えていた。マンはロサンゼルス到着後すぐにハリウッドと接触している。「4時にコリン、フランク夫妻、カーチャ、エリカとパラマウント・プロダクションへ」(Tb, 38/3/24)。サウル・コリン(1909-1967)は映画エージェントでハリウッドの事情通、ブルーノ・フランク(1887-1945)とその妻リーズルはミュンヘン以来の友人で、この時ブルーノは人気の映画会社「メトロ・ゴールドウィン・メイヤー(MGM)」専属の脚

12）Vgl. Scaff［2013］, S. 55.

13）Vgl. Bahr［2009］, S. 161-163. 亡命後だいぶ経ってからもマンはロサンゼルス市内の車での移動を煩わしく思っていたようだ。Vgl. Vaget［2012］, S. 221f.

本家、そして「パラマウント」はハリウッド草創期からの大手製作会社の一つである。そこでマンは同社の看板監督エルンスト・ルービッチュ(1892-1947)と電話で話し、その作品も観て、さらに名匠フリッツ・ラング(1890-1976)を撮影現場に訪ねた。その後も1ヶ月間の滞在中、仕事の合間に大小のパーティーに顔を出し、いくつものスタジオを訪問しては、ひっきりなしにハリウッドの関係者と会っている。例えば「ワーナー・ブラザーズ」の社主ジャック・ワーナー(1892-1978)がユダヤ人救援のために主催した寄付金集めのパーティーでは大勢のスターの前でスピーチしたり(vgl. Tb, 38/4/1)[14]、話題のアニメーション映画『白雪姫と七人の小人』(1937)を観て(vgl. Tb, 38/3/28)興味を抱いたウォルト・ディズニー(1901-1966)のスタジオに出かけては次回作『ファンタジア』(1940)の制作を見学したりした(vgl. Tb, 38/4/9)。[15]

マンは自他ともに認める映画好きで、ミュンヘン在住の頃から映画館によく通っていた。上のルービッチュのドイツ時代のサイレント映画『ズムルーン』(1920)を観ては(vgl. Tb, 20/9/24)、それを『魔の山』の「ビオスコープ」の場面に取り込んでいるし(vgl. GW III, 440f.; GKFA 5.1, 479f.)、また「ここ数年このモダンな生活現象［映画］に対する私の関心は真に切実なものにまで育ってきた、もっと言えば明朗な情熱の性格を持ってきた」(GW X, 898; E III, 85)とも述べている。ただしマンが「関心(Interesse)」、特に「情熱(Passion)」を伴うそれを口にするとき、そこには決まって批判的な距離が介在している。ハリウッドとの関係も例外ではなく、それはマンが後に、ハリウッドに隣接するビバリーヒルズではなく、サンセット大通りをさらにずっと西へ行った、太平洋岸に臨んだパシフィック・パリセーズに家を構えたことに地理的にも反映されていよう。[16] マンのハリウッドへの距離感はしかし――ロサンゼルスで個人的な交流もあったホルクハイマーやアドルノのような――「文化産業」に対する社会批判の形をとったわけではない。マンは芸術家として「思うに［…］映画は芸術とはあまり関わりがない」(GW X, 899; E III, 85)としながらも、自身が営む叙事的な物語芸術とは親和し、競合する面があると見ていた。

> それ［映画］は映像で物語る。映画が映し出す幻影の感覚的なリアリティはその精神、その最良の効果が叙事的であることを妨げない。そして映画が文芸的なものと触れ合うところがあるとすれば、まさにここだ。［…］映画は回想の技術を、心理学的な暗示を、人間および事物の細部の厳密さを知っており［…］物語作家はそこから大いにしばしば学ぶことができる。(GW X, 900;

14）このパーティーの参加者など詳細は、vgl. Vaget［2012］, S. 351-353.

15）この他に、MGM（4月12日、14日）、フォックス（4月22日）、ユニヴァーサル（4月23日）の各スタジオを訪ねた。

16）Vgl. Bahr［2009］, S. 157, 166-168.

E III, 87)

こうした映画へのライヴァル視に加えて、もともと彼がハリウッドに関心を寄せたのには作家としての野心も一役買っていた。すなわち自身の小説『ヨセフとその兄弟』の映画化である。先のディズニーの『白雪姫』についても「『ヨセフ』に照らして私には魅力的だ」(Tb, 38/3/28)として、ディズニーの場合はメルヒェンだが、マンの方は旧約聖書の神話の映像的再現に興趣をそそられたように思われる。折から『ヨセフとその兄弟』の第3部『エジプトのヨセフ』の英語版(1938)がアルフレッド･A･クノップ社から刊行され、売れ行きがよかったこともあって、出版主クノップの弟がプロデューサーを務めるMGMスタジオでは実際に映画化の構想が立てられ(vgl. Tb, 38/4/11)、先のコリンの尽力でだいぶ話は進んだようである(vgl. Tb, 38/4/13, 38/4/14)。しかしマンの脳裏にはこの時『エジプトのヨセフ』に続く第4部かつ最終部『養い人ヨセフ』のことが浮かんでいた。「英語の聖書を読む。心の中で第4巻の構想を描く。机の中の草案を思い出す」(Tb, 38/4/16)。映画は結局ハリウッドで実現することはなかったが、小説はパシフィック･パリセーズで5年後に書き上がる。「エジプトの空にも似たカリフォルニアの爽快な空の下」(GW XI, 662; E V, 192)で書かれた『養い人ヨセフ』は、よく言われるように主人公にフランクリン･ローズヴェルト大統領の人物と業績が投影されていることをはじめとして、マンのアメリカ亡命体験を吸収して成った作品である。幻に終わったハリウッド映画『ヨセフとその兄弟（エジプトのヨセフ）』――おそらくそれはあの『十戒』(1923)の向こうを張るような大スペクタクルになったことだろう[17] ――に対抗するかのように、あるいはとって替えるかのように、マンはロサンゼルスの風土を背景に、自身のメイド･イン･アメリカたる小説『養い人ヨセフ』を上梓し、『ヨセフとその兄弟』を完成させた。

3－3. 大学

ヴェーバーとマンのアメリカ滞在の特徴的な一面は当地のアカデミズムとの接触・交流である。前編で述べたように、ヴェーバーのアメリカ行きはもともとハーヴァード大学教授フーゴー･ミュンスターベルクの招きに応じたものであった。そして招待講演を行なったセントルイスの学芸会議では多くのアメリカの学者たちと知り合う機会に恵まれ、他にも逗留した先々で大学やカレッジを足繁く訪れた。トーマス･マンも最初のアメリカ滞在の際にイェール大学でゲーテについて記念講

17)『ヨセフ』の映画化に関連してのことだろう、マンは当時のMGMを代表する衣装デザイナー、ギルバート･エイドリアン(1903-1959)の邸宅にも招かれているが(vgl. Tb, 38/4/17)、このエイドリアンはもともと『十戒』の監督セシル･B･デミル(1881-1959)のもとでキャリアを開始した。彼のもっとも有名な仕事は――マンと会ってから間もない――ジュディ･ガーランド主演『オズの魔法使い』(1939)である。Vgl. https://en.wikipedia.org/wiki/Adrian_(costume_designer)

演を行なったのを皮切りに、その後の3度の旅行のいずれでもアカデミックな機関で講演や式辞を述べている。またハーヴァード大学をはじめ、8もの大学から名誉博士号を授かった。しかし何よりも大きかったのはアメリカで亡命生活に入ると同時にプリンストン大学の講師に就任したことである。[18] 二人にとってアメリカの大学は異郷にあって寄港地のような役目を果たしたと思われる。

ヴェーバーは先のシカゴ滞在の折、ミシガン湖に沿って北上した郊外の町エヴァンストンにあるノースウェスタン大学を訪れた。ストックヤードとは打って変わって、緑豊かな広々としたキャンパスの佇まいに「とても爽快」な気分を味わい、そこで「勉学とともに詩情にあふれたアメリカの学生生活」(MWG II/4, 294)を垣間見ている。ヴェーバー自身はハイデルベルク大学で学生組合に所属して、大酒を飲み、決闘を行なうなど、いわゆるバンカラな学生時代を送ったが、それと比べながらアメリカの学生たちのキャンパスライフをこう描写している。

> 詩情はわれわれ［ドイツ］の学生生活のそれとは異なる。［…］カレッジの学生（17／18歳から21／22歳）はふつう寄宿舎に入り、そこのルールに従って生活し、飲酒等に関して形式的でなくとも事実上管理され、カリキュラムは――いくつか選択科目もあるが――あらかじめ定められ、授業をサボることはなく、少なくとも週1回は教会に行き、四半期ごとに試験が課される。にもかかわらず卒業生においては青春の思い出のあらゆる魅惑はひとえにこの時代にある。大勢でやるスポーツ、好ましい社交形式、限りない精神的刺激、生涯にわたる数々の友情といったものがその成果だが、とりわけわれわれ［ドイツ］の場合よりも真剣に労働への順応(Gewöhnug zur Arbeit)が育まれる。(ebd.)

ここで言われているのは、いわゆる“undergraduates”、日本で言えば学部課程に在籍し、アメリカの大学の際立った特徴である全寮制のカレッジ教育、徹底したリベラルアーツ教育を施される学生たちのことである。ヴェーバーは後日、ボルティモアのジョンズ・ホプキンズ大学で実際に「1時間Undergraduateの授業」を見学し、「通常のテキストブックメソッド、すなわち『学生』は家で国民経済学の教科書［…］を30～40ページくらい予習してきた上で［講師から］試問されるという方式がここでは実に巧みに一種の講義と組み合わされていた」(364)と感心している。[19]「スポーツ」に

18）この就職は亡命前、4度目のアメリカ滞在中に内定した。Vgl. Tb, 38/5/24, 38/5/27. その経緯、特にアメリカにおけるマンのパトロンであるアグネス・マイアー(1887-1970)による斡旋、またハーヴァード大学との競合の詳細は、vgl. Mann / Meyer［1992］, S. 37-54.

19）他にもフィラデルフィア近郊のハヴァフォード・カレッジにおける同様の授業風景については、マリアンネによる詳しい報告がある。Vgl. MWG II/4, 358.

関しては、ボストンでハーヴァード対ペンシルヴェニアのアメリカンフットボールの試合を観戦し、大学だけでなく、町を挙げての「とんでもない大騒ぎ」(367)に圧倒された。その試合が行なわれた巨大なスタジアムはOBの多額の寄付によって建てられたばかりだった(vgl. 366)。[20] また「社交形式」に関してヴェーバーの心を打ったのは、ノースウェスタン大学での一こまである。

> エヴァンストンで私たちのホストであるゲーテ研究者が「学生組合の家」でちょうどそこにいた一人の新入生(freshman)を捕まえて、うっとりと彼らの社交クラブ(society)［…］の「歌(cantus)」を歌い出したのは感動的だった。しかも旋律は「おお樅の木」だった！［…］こうしたことには、この地における多くのことと同様、どこか子どもっぽいところ、良識と熱狂と無垢とが奇妙に入り混じったところがある。(295f.)

アメリカの伝統的な学生組合は一般に “Greek letter society” と呼ばれ、ギリシア文字を組み合わせたクラブ名を持っている。上のノースウェスタン大学のそれは「ΒΘΠ（ベータ・シータ・パイ）」といい、ヴェーバーも付言しているが、ドイツの学生組合の組み文字のように、会員間の符牒となっている。[21] しかし教師と学生が仲睦まじく合唱するなどは当時のドイツの大学ではまず見られない光景だろう。しかもそのメロディーがドイツの民謡ともなれば、ヴェーバーが覚えた奇妙な驚きの念が想像できる。彼の驚きをさらに掻き立てたのは、「チャペルレコード」と呼ばれる礼拝参加の制度である。

> シカゴのノースウェスタン大学［…］の学則を読むと、信じられない思いをさせられる。学生は毎日の礼拝の5分の3以上に出席しなければならない。ただし3時間の礼拝のかわりに1時間の講義を追加して聴講してもよい。必要以上の「チャペルレコード」(!!)があれば、次年度に貯金に回され(auf das nächste Studienjahr gutgeschrieben)、その分だけ礼拝に出席しなくてもよくなるが、「チャペルレコード」が不足すると、2年後に退学処分となる。(291)

---

20) このスタジアムや同窓会のことも含む、アメリカのカレッジ文化におけるフットボールの意義については、潮木［1993］、253-267頁参照。

21) トーマス・マンは1941年３月、カリフォルニア大学バークレー校で名誉博士号を授与された際、こうした学生社交クラブのうち全米で最も古い「ΦＢＫ（ファイ･ベータ･カッパ）」の名誉会員に選ばれた。その記念スピーチで、マンはこの「魔法の言葉」を「哲学は生の導き手(Philosophie, die Führerin des Lebens)」と読み解き、その心は「哲学と生の結びつき」、「生に対する哲学の責任感」という「本質的に民主主義的なもの」(GW XIII, 703)であると述べている。

確かにヴェーバーの目には「どこか子どもっぽい」もの（マリアンネには「偽善(cant)」[22]）に映ったにちがいないこの規則は、大学の便覧によれば、当局の意図としては「学生にどこそこの教会の信仰を強要するものではなく、男らしいキリスト教的人格の涵養に資する条件のもとで勉学を促進するため」[23] に設けられたという。

こうした集団スポーツ、社交クラブ、チャペル礼拝などに彩られたアメリカのカレッジ特有の詩情に満ちた文化がリベラルアーツのカリキュラムに基づく勉学と相まって「労働への順応」を養うとヴェーバーは見ている。後年、ヴェーバーはドイツの大学制度や文部政策を論じる際に[24]、この旅でのアメリカの大学についての見聞をしばしば引き合いに出すようになる。もっとも知られた例は講演『職業としての学問』(1917)の冒頭、ドイツの金権主義的な私講師制度とアメリカの官僚主義的な助手制度を対比した一節だが(vgl. MWG I/17, 71ff.)、他にも1911年にドレスデンで開催された大学教員会議の席上では、上で見たアメリカのカレッジの諸特徴（郊外の立地、全寮制、教授法、講義の出席義務、学生組合など）を数え挙げ、この伝統的なカレッジシステムがヨーロッパないしドイツの専門研究型の大学システムにとって代わられる傾向（その筆頭がヴェーバーも訪れたジョンズ・ホプキンズ大学[25]）を指摘する一方で、「アメリカの実業界の人々が私［ヴェーバー］に確言してくれたことによると、カレッジおよびカレッジ教育の特色の存続を望んでいるのはまさに実業界であり、そしてこのカレッジ教育はまずもって学問の人材養成を目指すものではなく、同年輩の学生や成人の間で自己主張できるような人格の修練、アメリカの国家・社会制度の基礎となるべき信条の修練を目的とする」(MWG I/13, 398; vgl. ebd., 329)ものであると述べている。これに対してドイツはドイツで近年、一種のアメリカナイズの現象として商科大学(Handelshochschule)の設立が相次いでいるが、ヴェーバーによれば、これらの商科大学は中途半端な産物で、そこに学びに来る商工業界の跡取りたちは昔ながらのドイツの大学の特典――「顔にいくつかの［決闘による］刀傷、少々の［放埒な］学生生活、少しばかり労働からの離反(Abgewöhnung der Arbeit)」――を求めているため、「これらのことがわれわれの次代の商人たちに教え込まれるならば、世界の偉大な労働国民、特にアメリカ人に太刀打ちできるのかどうか」(ebd.)甚だ疑問だとしている。ヴェーバーの目にアメリカの大学・学生の「労働への順応」とドイツの大学・学生の「労働からの離反」の対照は明らかである。そして前者では資本主義および民主主義の社会にふさわしい自主独立の人格・信条

22）ウェーバー［1987］、229頁。

23）Scaff［2013］, S. 64.

24）それらの主なテキストの日本語訳は、上山／三吉／西村［1979］で読むことができる。

25）ジョンズ・ホプキンズ大学について、潮木［1993］、5章参照。ヴェーバーはジョンズ・ホプキンズ大学で「労働の集中度」と「学問研究の高水準」(MWG II/4, 351)が学生募集の要請と両立していることに感銘を受けている。

が修練されているのに対して、後者では「組合の色帯をつけたり、刀傷を負ったりするなど、集中的な労働から逸脱した伝統的な学生生活全般を通じて獲得される『決闘応諾資格』や『予備役将校資格』が授ける封建的な威信を身につける」(MWG I/13, 330)ことが奨励されている。ヴェーバーはドイツの大学と企業に時代錯誤の「封建的な自惚れ」が蔓延していくことを危惧し、「冷厳な労働なくしてわれらの商工業界の市民層は世界におけるドイツの権力地位を確保しえない」(ebd., 333)と、アメリカを念頭にドイツの将来を憂慮していた。

マンがアメリカ亡命の最初の安住の地に定めたニュージャージー州のプリンストンは、シカゴ郊外のエヴァンストンに似て、ニューヨーク（ならびにフィラデルフィア）の衛星都市であり、かつ学園都市である。アイビーリーグの名門プリンストン大学を中心に、神学校や音楽カレッジ、そしてマンとも近所で交流のあったアルバート・アインシュタイン(1879-1955)が在籍したことで有名なプリンストン高等研究所[26]がある。

プリンストン大学におけるマンの肩書は「人文学講師(Lecturer in the Humanities)」といったが、それは特定の学部や大学院には所属せず、といって単なる客員身分でもなく、充実したリベラルアーツ教育で名高いプリンストン大学の伝統に則って、人文諸学を学際的にカバーする任務を負うものだった。ただそうは言っても、作家としての執筆活動に勤しむ身[27]としては、毎週定時に講義を開くわけにも行かず、実際は大学主催の公開講演と文学関連のセミナーのゲストスピーカーを不定期に務めることになった。1938年秋から1940年春までの3学期間に計20回近く登壇したマンはゲーテの『ファウスト』やヴァーグナーの『ニーベルングの指輪』などの古典について講演を行なうとともに、“preceptorial”と呼ばれる、メインの講義に付属し、文学作品などを題材に少人数で討論する形のセミナー[28]ではしばしば自身の作品を取り上げた。例えば、「プリンストン大学の学生のために」という副題を持つ「『魔の山』入門」(1939)もそうである。ホストは現代語の学部長でロマニストのクリスチャン・ガウス(1878-1951)、場所は大学ではなく高等研究所のクラブであった

26）当初マンもプリンストン高等研究所に招聘されるという話があり、所長のエイブラハム・フレクスナーと面会しているが、そこにプリンストン大学学長ハロルド・ドッズも同席し(vgl. Tb, 38/5/8)、結局大学の方に話は落ち着いたようである。Vgl. Mann / Meyer [1992], S. 39f. このフレクスナーによって、プリンストン高等研究所がジョンズ・ホプキンズ大学の後を受け、さらに専門研究に特化した学術組織として設立されたことなど、アメリカ史における研究所の意義については、斎藤 [1995]、IX章を参照。

27）プリンストン時代のマンの多産で多忙な活動全般は、小林 [1979]、3-15頁を参照。

28）“preceptorial”は元大統領ウッドロー・ウィルソンがプリンストン大学の学長時代(1902-1910)に新たに導入した授業形態で、それまでのテキスト復唱中心の授業を改めるとともに、ジョンズ・ホプキンズ大学に代表される専門研究大学への批判に基づいて取り入れられたという。潮木 [1993]、175頁参照。

(vgl. Tb, 39/5/10)。ドイツ語・ドイツ文学の分野に限らない学際的・開放的なセミナー――ただし“Gentlemen”(GW XI, 602)という呼びかけからわかるように、当時男子校だったプリンストン大学に女性はいない――において、マンは当然英語でスピーチしたのだが、そのことは「気を重くするものではなく、軽くするもの」(ebd.)で、『魔の山』の主人公ハンス・カストルプがショーシャ夫人にフランス語で愛を告白したように、「他の言語に置き換えて話すことにより、自身の書物について話す作者が覚える気後れが和らげられる」(GW XI, 603)としている。しかしそうは言いながらも、発表後の英語による質疑応答は煩わしく思ったようだ。それはこうした少人数のセミナーに限らず、多くの聴衆向けの講演でも同様で、英語でのフリーな発話を苦手にしていたマンはこの“Questions”というアメリカの「極めて民主的な慣行」[29]には常々辟易しており、妻や娘に通訳を任せるほどだった。[30] この『魔の山』セミナーの日は2回も質疑応答の時間があり、息子のゴーロに助けてもらいながら何とか切り抜けたようである。「かなり疲弊した。奇妙な若者たち」(Tb, 39/5/10)と当日の日記にあるが、ここで「奇妙な」と訳した“kurios”には英語の“curious”の「好奇心が強い」という意味も幾分ありそうで、マンを質問攻めにした学生たちの姿が目に浮かんでくる(vgl. auch Tb, 40/3/18)。

アメリカのアカデミズムの観点から「『魔の山』入門」でもう一つ目に留まるのは、アメリカ人の手になる二つの『魔の山』論を好意的に参照していることである。一つは『魔の山』研究の古典、ヘルマン・J・ヴァイガント(1892-1985)の『トーマス・マンの小説「魔の山」』(1933)、もう一つはハワード・S・ネメロフ(1920-1991)の「探求する主人公――トーマス・マンの作品における普遍的シンボルとしての神話」である。「作者自らが自身の作品の一番の事情通であり解説者であると思うのはまちがいである」(GW XI, 614)として、マンはこれらの優れた解釈を歓迎しているのだが、イェール大学教授ヴァイガントの定評ある著作はともかく、未公表の原稿で送られてきたネメロフの論文に大いに賛意を表している。後日実際に会ってわかったようだが(vgl. Tb, 39/10/22)、ネメロフはこの時、弱冠19歳のハーヴァード大学のundergraduateであった。アメリカの大学にこういう才気あふれる若者がいることにマンは後生畏るべしの感を抱いたにちがいない。[31]

この『魔の山』セミナーの1週間後、マンはプリンストン大学の名誉博士号授与の式典に臨み(vgl.

29）Vaget［2012］, S. 288.

30）この点、ヴェーバーはマンと異なり闊達だった。今日では問題発言ながら「私の黒人英語(Nigger-English)」(MWG II/4, 364)と自嘲し、英語にはあまり自信がなかったようだが、例えばジョンズ・ホプキンズ大学で参観した経済学のセミナーでは議論に割って入るなど、積極的に英語でのやりとりを行なっている。Vgl. ebd.

31）実際ネメロフは後に詩人として名を成し、マンもそのドイツ文学顧問に就いたアメリカ国会図書館の「桂冠詩人(poet laureate)」となった。Vgl. Vaget［2012］, S. 336.

Tb, 39/5/18)、感謝の辞を述べる。そのテーマはまさに「感謝」であり、「感謝」という人間の徳性は受動的であるばかりでなく能動的でもあり、多くを受け取るとともに多くを与えるもので、自分は芸術家としてそういう「感謝」の徳に恵まれた存在だと言う。そしてかつての、すなわちナチズムに支配される前のドイツも「創造的な感謝の国、受け取り与える国」(GW XIII, 124)であったのだが、今やアメリカが「受け取り与えることにおいて偉大な」、「生産的な感謝の国」(GW XIII, 126)として、ドイツを追われた自分を寛大に受け入れ、かつ何くれとなく与えてくれることに重ねて感謝の念を表明して、締め括りにこう述べる。

> 時が来れば、私は法律の文言どおりにみなさまの同国人になります。しかし貴国の大いなる精神諸団体は国家にとうに先んじています。アメリカ芸術・文学アカデミーの記章は私に「我が家にあり」と告げております。みなさまの有名大学の卒業式は何度も私にアカデミックな市民権［名誉博士号］を与えてくれました。そしてこの種のもっとも強固な絆こそプリンストン大学が私の慎ましい講師としての働きの節目にあたり今日私に授けてくださるこの特別な栄誉であると言わねばなりません。そうです、故郷を失った者はここプリンストンで、ここアメリカで再び我が家にあるのです。(GW XIII, 127)

この言葉の向こうに透けて見えるのは、数年前にマンの身に降りかかった、これと真逆の事態である。1936年末、マンはナチス政権によりドイツ国籍を剥奪され、それを受けてボン大学はマンにかつて授与していた名誉博士号を取り消した。この措置に対して、マンは同大学宛てに公開書簡を送り、同時にナチスドイツへの最終的な絶交状としたのだった。その際、いわゆる「画一化(Gleichschaltung)」の波にさらわれ、焚書や公職追放の主要な舞台として「忌まわしい権力の温床」と化したドイツの大学の「重い共犯罪」(GW XII, 785; E IV, 184)を告発している。そしてボン大学に代わって、今やハーヴァード大学が自分にPh. D.を与えるに至ったこと（この前年にアインシュタインとともに授与式に出席[32]）を誇りと皮肉交じりに書き添えている。「自由な精神の世界」(GW XII, 786; E IV, 185)の気風に満ちたアメリカの大学が国家に先んじてマンを迎え入れたのに対し、ドイツの大学は国家権力に追随して彼の本を焼き、彼を放逐したのであった。

余談ながら、ヴェーバーが学び、教えたハイデルベルク大学にはアメリカ人有志の寄付によって1931年に新設された講堂があり[33]、その正面には「生ける精神のために(Dem lebendigen Geist)」と

32）その時の模様は、Vaget［2012］の写真1参照。

33）音頭をとったのは、ハイデルベルク大学の元留学生で、ドイツ駐在アメリカ大使のジェイコブ・グールド・シュールマン(1854-1942)。詳しくは、ハイデルベルク大学の報道記事、https://www.uni-heidelberg.de/

刻まれているが、この言葉はナチス時代、当局によって「ドイツ精神のために」と書き換えられてしまった。マンはこのことに触れ、「そのようにして政権自らドイツ国の大学には――当分の間――生ける精神の住み家はないと公言した」(GW XIII, 344)と、ニューヨークの "New School for Social Research" 付設の「政治・社会科学院(Graduate Faculty of Political and Social Science)」、通称「亡命大学」[34] の祝宴の席上で述べている。そして亡命大学が代わりにこのモットーを採用することで、「ドイツを追われた生ける精神がこの国［アメリカ］に住み家を見出した」(ebd.)証左とするよう提案している。ヴェーバーの著作や理論はこのニュースクールおよび亡命大学に集まった亡命知識人を一つの回路としてアメリカに移入されることになるが、これはある意味で、生身のヴェーバーが望みながら叶わなかったアメリカ再訪を彼の「生ける精神」が果たしたということになろう。[35]

3－4. 移民

前編で述べたように、マンにもヴェーバーにもアメリカ――マンの場合は南米だったが――に渡った近親の人々がいた。アメリカが基本的に「移民の国」であり、19世紀にドイツから大量の人々が渡って行った以上、これは何も珍しいことではない。しかしマンとヴェーバーのアメリカ行、そして彼らのアメリカ観を考える際には、この「移民」のトピックは注目せざるを得ない。ヴェーバーの主な旅行目的は、表向きセントルイスの学芸会議での講演だったが、私的にはアメリカに移り住んだ親類縁者を訪ねて周ることであったし、マンはマンで1934年以来4度の渡米を通じて最終目標となったのは、家族とともに自らアメリカに移住（亡命）することであった。

ヴェーバーがアメリカを訪れた20世紀初頭は移民の数が急激に増えた時期に当たる。1904年は80万人以上、翌1905年には100万人を超え、20世紀最初の10年間で史上最大規模の820万人もの移民数を記録した。[36] しかもこの時期に、西欧や北欧からのいわゆる「旧移民」に対して、南欧（イタリア）や東欧（ハプスブルク帝国、ロシア）からの「新移民」が急増し、全体の3分の2以上を占めるようになり、なかでもユダヤ人が目立って多かった。ヴェーバー夫妻が乗船した「ブレーメン」号も移民の群れでごった返し、ほとんどが「三等船室(Zwischendeck)」に詰め込まれていた。マリ

---

presse/news09/pm290209-3gesch.htmlを参照。

34）「ニュースクール」および「亡命大学」については、前川［2014］、2章参照。

35）そうした亡命知識人の一人で、ナチズム研究の書『ビヒモス』で有名なフランツ・ノイマン(1900-1954)は「まさにここアメリカ合衆国ではじめてヴェーバーは真の生命を得た」と言っている。またこれについて「ノイマンにとってヴェーバーの経験的・知的冷静さへの努力はベンジャミン・フランクリンとウィリアム・ジェイムズの国に故郷を見出したかのようだった」というスカッフのコメントも参照。Vgl. Scaff［2013］, S. 293.

36）Vgl. Scaff［2013］, S. 35f.

アンネは「400人のロシアとポーランドのユダヤ人」が船内で劣悪な状態に置かれており、それに対して「『われわれ』はここでは実際三等船客の犠牲でのみ生きている。実に嫌らしい」(MWG II/4, 264)と嘆いている。

この20世紀初頭の移民の大波に対して、マンが亡命した1930年代の移民をめぐる事情は大きく様変わりしていた。第一次世界大戦の間に一挙に減少した移民は、戦後に再び増加傾向に転じるが、ここでアメリカは排外主義的な移民制限に乗り出す。1924年に移民割当法を制定し、出身国ごとに移民の上限数を定め、入国管理を厳しくした（南欧・東欧出身の「新移民」を大幅に制限、日本人移民は完全に遮断)。さらに大恐慌が追い打ちをかけ、1930年代には移民への風当たりが一層強まっていく。その中で、ヨーロッパのファシズムから逃れてアメリカに庇護を求める亡命者や難民が増えてくるのである。FDR政権は大枠としては従来の移民制限政策を維持しつつ、在外領事館でのビザ発給を柔軟にすることで、これらの亡命者や難民をかなり受け入れるようになる。[37] マンもそのうちの一人、ただし非常に幸運な一人だった。彼は1938年春の講演旅行で最後ニューヨークに戻る前、カナダのトロントに立ち寄り、妻とともに当地のアメリカ領事館に出向いて、いわゆる “first papers” を提出し、アメリカ市民権を申請した。日記には煩瑣な手続に倦んだ様子が窺えるが(vgl. Tb, 38/5/2, 38/5/3)、それでもこの短期間でスムーズにアメリカへの移住が認可されたのは――身元保証人アグネス・マイアーの根回しもあって――亡命者の中で例外的なケースだと言える。[38]

ヴェーバーはテネシーやノースカロライナの自分の親戚のみならず、旅行く先々でドイツにルーツを持つアメリカ人の家族と親しく交際している。先のミュンスターベルク（1897年にアメリカ移住）はもちろんのこと、ナイアガラのノーストナワンダではドイツ福音教会の牧師であるハンス・ハウプト（1869年生、ハレ出身、1894年移住)、セントルイスでは銀行家のアウグスト・ゲーナー(1846年生、ハノーファー出身、1859年移住)、ボストン近郊のワイオミングでは翻訳業を営むオットー・フォン・クロック（1864年生、フライブルクとグライフスヴァルトで修学、1885年移住)、そしてニューヨークのブルックリンではフリードリヒ・カップ（前編参照）の娘婿であるパウルとアルフレートのリヒテンシュタイン兄弟（それぞれ1847、1848年の生まれ、フランクフルト出身、1860年代後半に移住）といった面々と交わりながら、ヴェーバーはアメリカにおける彼らの社会的地位に関心を寄せている。ミュンスターベルクへの礼状では「ハーヴァードで今あなたが占めている社会的地位をドイツ人としてあなたが首尾よく手に入れたことを私がどれだけ喜んだことか、そしてこの成功をドイツ人であること(Deutschtum)の関心からどれだけすばらしく価値あることと

37）以上の移民制限や移民法制に関しては、前川［2014］、16-20頁、有賀／能登路［2005］、55-72頁参照。

38）Vgl. Vaget［2012］, S. 61-63.

思っているか」(393)と、ドイツのナショナルな観点からアメリカでのミュンスターベルクの出世をねぎらっている。またセントルイスでヴェーバー夫妻のホストになったゲーナー家は町の裕福なアッパークラスに属していたが、もともとヴェストファーレンの貧農の生まれである主人のアウグストはアメリカ移住後、南北戦争で北軍に従軍し、不動産の公証人として「全く独力で身を立て(selfmade)、しかも完全なジェントルマン、見目好く、押し出しも立派で、優れた作法を身に着けている」(285)と、ヴェーバーはアメリカ社会にすっかり適応したドイツ系移民の模範を見出したようである。それに引き換え、ノーストナワンダの牧師ハウプトの一家はつましい生活を送り、「ドイツ語『訛り(Accent)』」(277)の英語のために、また労働者の教区を率いているために「二流(second rate)」と見なされ、近所の「一流(first set)」の家族への仲間入りは拒まれている。ヴェーバーの見るところ、こうしたことは「『一流』に属するとされる街路の住宅を借りることではじめてジェントルマンの一員たる決意がここでは表明され、『社交界(society)』」への受け入れに至る――ここ［アメリカ］の民主主義社会が組織される際の純粋に機械的な目印の奇妙な帰結である」(278)と、機会均等を保障するはずのアメリカの民主主義に潜む格差のメカニズムが指摘されている。これはシカゴで目撃したアングロサクソン系のヤンキーを頂点とする序列と排他のシステムに通じている。またヴェーバーの従姉ラウラ・ファレンシュタイン(1863-1930)の夫であるオットー・フォン・クロックはアメリカに渡って書店員から身を起こし、翻訳会社を立ち上げ、「大いに繁盛している」が、「情熱的なドイツ人で、ヤンキーに対する憎しみに満ち、ただし当地の大半のドイツ人をビールに溺れていると軽蔑し、確固とした自尊心を持っている」(361)。このクロックも上のゲーナーのような「独立独行の男(selfmade man)」ではあるが、ゲーナーほどにはアメリカに馴染んでおらず、ヤンキー憎しということではノースカロライナのヴェーバーの親戚たちと同じで(vgl. 346)、その一員たる妻ラウラといっしょになって8人の子どもたちに「ドイツ人であること(Deutschtum)」を叩きこみ、また家系研究にものめりこんで「ドイツへの郷愁」(377f.)を募らせている。しかしヴェーバーはオットーもラウラもドイツにはまったく適さないだろうと見ている。親戚の間で「植民地の子(Kolonialkind)」と綽名されていたラウラについて、「彼女はここ［アメリカ］の腐敗と不正に対する怒りにもかかわらず、ドイツよりもここの生活に千倍も適応している」(362)と言っている。ラウラは早くに両親を亡くし、一時シュトラースブルクのヴェーバーの伯母のもとに身を寄せたが、折り合いが悪く、1887年に兄を頼ってアメリカに渡り、ボストンでオットーと知り合い、結婚したのであった。[39] ヴェーバーはアメリカで苦労しながらも活路を見出したラウラやオットーに好印象を抱き、また先の不遇なハウプト家に対しても共感を示して、「このような生活条件のもとでこの人たち（そしてその子どもたち）が現に今あるところの者になり、そしてあり続けていることに私たち

39）詳しくは、vgl. Roth［2001］, S. 362-370.

は深い尊敬の念を覚える」(278)と述べている。最後にニューヨークのリヒテンシュタイン兄弟については、マリアンネが「とても陽気だが、他にこれということもない銀行家」(385)と一蹴しているが、マックスの方は彼らから聞いたエピソード――近づきになったアメリカ人は最初に「どちらの教会に所属していますか？」と不躾に質問してくる(vgl. 405)――を帰国後にまとめた論説『北アメリカの「教会」と「セクト」』(1906)にさっそく引いていることからも(vgl. MWG I/9, 436)、実のあるやりとりを交わしたようである。リヒテンシュタインは教会が多く、信心深いブルックリン界隈にあって、そこに長らく暮らすヤンキーたちとの交際に困難を覚えていたが、それはヴェーバーが「生粋のヤンキー気質(das genuine Yankeetum)」(ebd.)と呼ぶ、禁欲的プロテスタントの各種セクトに淵源を持つ独特な宗教性に疎外されていたからである。他方、ヴェーバーは特に触れていないが、リヒテンシュタインは「ニューヨーク市ドイツ協会(Deutsche Gesellschaft der Stadt New York)」の有力会員であり、アメリカで成功したビジネスマンとして、同胞のドイツ系移民のためのさまざまな奉仕活動に尽力していた。特に兄のパウルは義父カップの跡を継いでその幹事となり、第一次世界大戦中は会長も務めた。[40] だがこの第一次大戦は彼らドイツ系移民にとって試練の時となった。ドイツとアメリカの架け橋たろうと努力してきたミュンスターベルクは失意のうちに亡くなり、フォン･クロック夫妻は事業が傾いてますますドイツへの身びいきの感情が強まり、パウル・リヒテンシュタイン率いる「ドイツ協会」は会員が激減する。

第一次大戦中の1915年5月、ドイツ軍による客船ルシタニア号の撃沈でアメリカ人が多数犠牲になったことをきっかけにアメリカで反ドイツ感情が高まり、やがてドイツと開戦するに至って、ドイツ系アメリカ人はいわゆる「ハイフン付きアメリカ人(hyphenated Americans, Bindestrich-Amerikaner)」として、これまで以上に「二流」市民の差別的扱いを受けるようになる。[41] ヴェーバーがすでに見てとっていたドイツ系移民の微妙に困難な社会的立場は、第一次大戦以後常態化し、トーマス・マンをはじめとする後の反ナチス亡命者にあっても――「亡命」という事情が加わったにせよ――基本的に変わらなかった。確かにマンは例外的に恵まれた立場にあったとはいえ、高齢（63歳）になって移住したことや英語の不自由ということをとっても、そう易々とアメリカに順応したわけではなかった。それゆえにまた、その恵まれた立場を活かして、自分よりも困難な状況にあるドイツ系の同胞たちを積極的に援助しようとしたのである。そうした活動の一端を、彼に身近な亡命者

40）Vgl. Roth［2005］, p. 97-98.

41）Vgl. Vaget［2012］, S. 292. 先述の、アメリカにおけるトーマス･マン研究のパイオニアであるヘルマン･ヴァイガントもドイツ系のために苦汁を嘗め、「私の経験ではドイツの祖先をもつ第2世代のアメリカ人は全体として二流アメリカ人(second class Americans)に分類されている」と述懐している。Vgl. ebd., S. 293.

の動向も交えて見ておこう。

マン、そしてヴェーバーとも親交があった劇作家エルンスト・トラー(1893-1939)は、ナチス政権成立後、早々にアメリカに亡命したが、マンがプリンストンに移住して間もなく、ニューヨークで自殺した。それを受けてマンは「アメリカ作家連盟(American Writers League)」の集まりでスピーチを行ない、トラーを「時代の殉教者」(GW XIII, 844)と呼んで、ナチスに追われた一人の亡命作家の末路を悼んだ。しかしスピーチ全体の口調は悲壮ではなく、「ドイツの知的移民(German intellectual emigration)とその諸組織の名において」(ebd.)アメリカの作家たちの共感に感謝し、さらなる連帯を呼びかけている。ここには先のボン大学への公開書簡で示された「私は殉教者であるよりも、はるかに代表者に生まれついている」(GW XII, 787; E IV, 185)とするマンの自負が見てとれ、トラーが歩んだ孤独な「殉教者」の道ではなく、ドイツの知的移民の「代表者」として、ここアメリカで確実な地歩を築こうとする意志が表れている。

この約1年後（1940年6月）、ナチスドイツがパリを陥落させ、フランスを占領すると、南仏に亡命していた兄のハインリヒ・マン(1871-1950)はじめ多くのドイツ知識人がナチスに引き渡される危険が生じた。そこでトーマス・マンはニューアーク大学学長フランク・キングドン(1894-1972)と協力して「緊急救出委員会(Emergency Rescue Committee)」を設立し、彼らのフランス脱出とアメリカ渡航のために手を尽くす。委員会での声明文でマンはヒトラーに対抗する民主主義勢力の連帯がこの救出活動には欠かせないとして、次のように訴える。

> われわれの良心の声に対して、アメリカはこんなに多くのよそ者(Fremde)の流入から身を守らなければならないというような反論はいったい何の意味があるのでしょうか？［移民から成る］[42] この国は他の諸国民よりも超国民的な(übernational)来歴と統合し吸収する力とにその精神的・道徳的長所があるのです！どうしてここでよそ者への敵意(Fremden-Feindlichkeit)がはびこることなどあり得ようか、どうしてアメリカがこの地を求めてやって来る、民主主義的信念の証人であり、自由の圧殺者［ヒトラー］の犠牲者である人々をよそ者と見なせようか？この地でアメリカ的でなく、よそ者なのは、ヒトラーの転落を望まず、公言するにせよしないにせよ、ヒトラーの肩を持つ者である。民主主義と自由の側に立ち、苦しんできた人は誰一人ここではよそ者と見なすことはできません。(GW XI, 978; E V, 154)

年来の排外主義的な移民政策と孤立主義的な中立政策を背景に、亡命者を厄介者として疎んずるアメリカの世論に対して、マンはここで本来「移民の国」であるアメリカの超国民的な統合力に期待

42）英語のタイプ原稿にある補足。Vgl. E V, 356.

をかけた。FDR政権の協力も得た緊急救出委員会の活動は功を奏し、2000人以上の亡命者を救い出すことができた。兄ハインリヒ、そして息子ゴーロ・マンもピレネー山脈を徒歩で越えて、リスボンからの船でニューヨークに到着した。だが、その後のアメリカでの生活で、ゴーロは父の後押しがありながらも大学に職を得るのに苦労し[43]、ハインリヒは当初ハリウッドで脚本家の仕事にありつくものの、契約が切れると窮乏に陥り、弟の支援を仰ぐようになる。[44] フランスではそれこそ水を得たように亡命作家の代表として健筆を振るっていたハインリヒだったが、アメリカに渡ってからの晩年の10年間は終始「よそ者」として所を得なかった。[45] アメリカにおいてマン兄弟の立場は逆転し、明暗が分かれることになった。

1941年12月、日本軍の真珠湾攻撃により、ついにアメリカが参戦すると、日系移民はもちろんのこと、枢軸国側のドイツおよびイタリア系の人々も、二流の「ハイフン付きアメリカ人」からもう一段進んで、いわゆる「敵性外国人(enemy aliens)」のレッテルを貼られるようになる。日系人がこぞって強制収容所に送られたのとは違って[46]、ドイツ・イタリア系の移民や亡命者たちはそれほど大きな実害を被ったわけではなく（短波受信機の携行禁止、夜間の外出制限、旅行前の届出等)、またマン自身も形式的ながらチェコスロバキア国籍を保持していたために該当しなかったが、ひどく困惑させられたようである。[47] そこでアインシュタインや指揮者のアルトゥーロ・トスカニーニ(1867-1957)、娘婿の文学者ジョゼッペ・ボルゲーゼ(1882-1952)[48] ら、ドイツとイタリアの亡命者仲間と連署でローズヴェルト大統領に電報を送り、上の緊急救出委員会でのアピールを強めた形で、「これらナチとファシストの圧制の犠牲者、民主主義の忠実で一貫した擁護者」がまちがっても「敵性外国人」扱いされることのないよう、大統領の権限をもって「アメリカの民主主義に対する潜在的な敵と全体主義的な悪の犠牲者にしてその断固たる敵対者との間」[49] に明確な区別を設けてほしいと懇請している。またロサンゼルスで開かれた意見聴聞会に呼ばれては、「私はただ単に移民のことだけを考えているのではまったくなく、この国［アメリカ］の闘争心を気に懸けているのです。［…］己の敵［ファシズム諸国］のもっとも親密な敵［すなわち亡命者］を征することに満悦する

43）先に触れたニューヨークのニュースクールにも就職を試みたが、うまくいかなかった。Vgl. E V, 356.

44）Vgl. Kurzke［1999］, S. 478f.

45）Vgl. Wißkirchen［1999］, S. 96-98, 108.

46）ロサンゼルスのパシフィック・パリセーズのマン家に雇われていた日系の庭師ワタルと家政婦コトの夫婦も戦時中に財産没収と強制収容の憂き目に遭ったということである。Vgl. GKFA 19.1, 351.

47）Vgl. Mann / Meyer［1992］, S. 349.

48）ボルゲーゼとマンの関係については、vgl. Vaget［2012］, S. 271-274.

49）Mann［1992］, S. 237.

ような国民は当の敵を倒すのにベストな心理状態にあるようには思われません」[50] とかなり辛辣な答弁をしている。さらにドイツ系アメリカ人一般に対しても、マンはラジオを通じて呼びかけを行なった。「ドイツのバックグラウンドを持ち、ドイツの伝統を引くアメリカ人であることは［ドイツとアメリカが交戦している］今日そう容易な立場ではない」(GW XI, 1053)と彼らが抱えるジレンマに理解を寄せつつ、しかし決然と――近くアメリカ国籍を取り、名実ともにドイツ系アメリカ人になる自分にも言い聞かせるように――「いや、『ドイツ』と『アメリカ』の間のハイフンは心的な断絶、感情や忠誠義務の葛藤であってはならない」(GW XI, 1055)と、ドイツ人でもアメリカ人でもなく、まさにドイツ系アメリカ人として確固としたアイデンティティを持つように呼びかける。それはすなわちナチスの支配下にある現在のドイツを彼らドイツ系アメリカ人の先祖が後にしてきた過去のドイツと混同することなく、ひとえにナチスドイツの打倒とアメリカの勝利に貢献することであるという。

> いや、あなたがた［ドイツ系アメリカ人］がみなアメリカと連合諸国の勝利のために願い、働くとき、自らのルーツがある国［ドイツ］にいささかも不忠を働くことにはなりません。というのはドイツのためにもこの勝利はかちとられることになるからです。(GW XI, 1056)

「敵性外国人」という汚名返上のために、アメリカに忠誠を示し、実際に兵士として戦ったドイツ系アメリカ人は決して少なくなかっただろう。マンの次男ゴーロ、そして長男クラウスもアメリカ兵となってヨーロッパに出征し、ドイツの敗北を見届けることになる。

自殺する者、困窮する者、敵視される者、兵士になる者――マンの周囲の亡命者たちは多かれ少なかれ困難な身の処し方を迫られた。その中にあってマンは彼らドイツ人亡命者、もっと広くはドイツ系移民の代表としての自覚、そしてドイツ系アメリカ人としての自負を持って、言論を武器に第二次世界大戦を闘い抜いた。

以上、4点のトピックに絞って、ヴェーバーとマンのアメリカ体験を具体的に描写してきた。簡単に振り返っておくと、まず「鉄道」というアメリカの産業資本主義の基幹にして機関にはヴェーバーもマンも――特に「プルマン・カー」の――大きな恩恵を受けた。ヴェーバーのルートはかつて1830年代初めにアレクシス・ド・トクヴィルが旅したそれに似通っているが[51]、トクヴィルが主に馬車と汽船で約9ヶ月かかったのに対して、20世紀初頭のヴェーバーは鉄道を利用して2ヶ月余りで

50）Ebd., S. 251.

51）オッフェ［2009］、59頁参照。

周った。それから30数年後、マンの方は大西洋岸から太平洋岸まで、さながら昔日の「巡回説教師」のように全米各地の都市を講演して巡ったが、これも2ヶ月間、大荷物とともにやはり列車に揺られてのことだった。移動時間のロスと距離感覚の麻痺は確かにあったけれども、それにも増して、広くアメリカを知り、多くのアメリカ人と交わったことは二人のアメリカ体験を豊かにしたことはまちがいない。

次に、鉄道が結ぶアメリカの「都市」では、ニューヨークを共通の起点ないし基点に、ヴェーバーは中西部のシカゴ、マンは西海岸のロサンゼルスに注目した。ヴェーバーにとってシカゴはストックヤードを中心にした資本主義的産業労働の合理性と、ストライキ騒動に表れた資本主義の矛盾対立（労使間のみならず、労働者どうしのエスニックなそれも含む）の展覧場だった。マンにとってロサンゼルスはその風土はもとより、ハリウッドを中心に――マンの目にはそれほど映らなかったが、これも資本主義の論理が統べる産業である――映画の都として作家的関心を引いた。ヴェーバーが旅行者としてシカゴの町の喧騒のただ中に身を置いて、そのダイナミズムを観察したのに対して、マンはその後ロサンゼルスの生活者になると、ハリウッドとは少し距離をとり、対抗意識を持ちながら創作に勤しんだ。

また次に、これら大都市と並んで、ヴェーバーとマンがよく訪れたのが、多くその郊外に立地するアメリカの「大学」だった。アメリカの知識人とコンタクトを結ぶ場として、二人にとって大学は大いに利するところがあった。さらに、そこで行なわれているリベラルでかつ一定の規律を持ったカレッジ教育に二人とも感心し、ヴェーバーはそこに資本主義的労働への適応と民主主義的信条の育成の効果を認め、マンは自ら講師としてその自由で寛大な気風に大いに与った。それと対照的にドイツの大学では、資本主義にも民主主義にもそぐわない封建的な尊大さが幅を利かせているとヴェーバーは批判し、そして結局はナチス権力に唯々諾々と従うだけのいわば「死せる精神」がはびこる場になったとマンは断じた。

最後に、アメリカにおける「移民」の問題は二人にとって身近で切実なドイツ系移民をめぐって集約的に現れた。ドイツ系の人々は「旧移民」に属してはいたものの、アングロサクソン系のヤンキーに疎外され、「新移民」との競合に曝され、第一次大戦を経て決定的に「ハイフン付きアメリカ人」として差別され、第二次大戦に至っては「敵性外国人」扱いを受けるまでになる。ヴェーバーは個人的に交際したドイツ系移民のアメリカ社会への順応と疎外の様子をつぶさに見ることで、彼らの “Deutschtum”、すなわちドイツ人としてのアイデンティティの行方を、特に「ヤンキー気質(Yankeetum)」との関連で、見定めようとした。マンは身の回りの亡命者たちの困難な境遇を心配しながら、機会を捉えてはアメリカの世論に訴え、ナチスに徹底的に対抗するために、自由と民主主義の名においてドイツ系移民との連帯・共闘を呼びかけた。このことはまたドイツ系移民の「代表者」を自任する自身のドイツ人としてのアイデンティティのあり方、さらにはドイツ系アメリカ

人たちの「ハイフン」に象徴されるドイツの出自とアメリカの市民であることをめぐるアイデンティティの葛藤を問い直すことでもあった。

こうしてヴェーバーとマンが思い描く「アメリカ」像は最終的に二つの焦点を結ぶことになる。すなわち資本主義と民主主義である。（後編に続く。）

参考文献

有賀夏紀／能登路雅子（編）［2005］：『史料で読むアメリカ文化史4　アメリカの世紀　1920年代－1950年代』東京大学出版会

マリアンネ・ウェーバー［1987］：『マックス・ウェーバー』（大久保和郎 訳）みすず書房

上山安敏／三吉敏博／西村稔（編訳）［1979］：『ウェーバーの大学論』木鐸社

潮木守一［1993］：『アメリカの大学』講談社学術文庫

クラウス・オッフェ［2009］：『アメリカの省察 トクヴィル・ウェーバー・アドルノ』（野口雅弘 訳）法政大学出版局

小林佳世子［1979］：「アメリカに於けるトーマス・マン(1) ――プリンストン時代――」、駒澤大学外国語部『外国語部論集』10、1-22頁所載

斎藤眞［1995］：『アメリカとは何か』平凡社ライブラリー

佐々木隆／大井浩二（編）［2006］：『史料で読むアメリカ文化史3　都市産業社会の到来　1860年代－1910年代』東京大学出版会

前川玲子［2014］：『亡命知識人たちのアメリカ』世界思想社

Bahr, Ehrhard［2009］: „Nach Westwood zum Haarschneiden.“ Zur externen und internen Topographie des kalifornischen Exils von Thomas Mann. In: *Thomas Mann Jahrbuch*. Bd. 22, S. 157-173.

Heine, Gert / Schommer, Paul［2004］: *Thomas Mann Chronik*. Frankfurt a. M. (Vittorio Klostermann)

Kurzke, Hermann［1999］: *Thomas Mann. Das Leben als Kunstwerk*. München (C. H. Beck)

Mann, Thomas［1974/1990］: *Gesammelte Werke in dreizehn Bänden.* Frankfurt a. M. (Fischer) = GW

Mann, Thomas［1977-1995］: *Tagebücher*. 10 Bde. Hrsg. v. Peter de Mendelssohn / Inge Jens. Frankfurt a. M. (Fischer) = Tb

Mann, Thomas［1992］: *Briefe II. 1937-1947*. Hrsg. v. Erika Mann. Frankfurt a. M. (Fischer)

Mann, Thomas / Meyer, Agnes E.［1992］: *Briefwechsel 1937-1955*. Hrsg. v. Hans R. Vaget. Frankfurt a. M. (Fischer)

Mann, Thomas［1993-1997］: *Essays.* 6 Bde. Hrsg. v. Hermann Kurzke / Stephan Stachorski. Frankfurt a. M. (Fischer) = E

Mann, Thomas［2002ff.］: *Große kommentierte Frankfurter Ausgabe. Werke － Briefe － Tagebücher.* Frankfurt a. M. (Fischer) = GKFA

Roth, Guenther［2001］: *Max Webers deutsch-englische Familiengeschichte 1800-1950*. Tübingen (Mohr Siebeck)

Roth, Guenther［2005］: Transatlantic Connections. A Cosmopolitan Context for Max and Marianne Weber's New York Visit 1904. In: *Max Weber Studies* 5-1, p. 81-112.

Scaff, Lawrence A.［2013］: *Max Weber in Amerika*. Berlin (Duncker & Humblot)［Original: *Max Weber in America*. Princeton (Princeton University Press) 2011］

Vaget, Hans R.［2012］: *Thomas Mann, der Amerikaner. Leben und Werk im amerikanischen Exil 1938-1952.* 2. Aufl. Frankfurt a. M. (Fischer)［1. Aufl.: 2011］

Weber, Max［1984-2020］: *Max Weber-Gesamtausgabe*. Tübingen (Mohr) = MWG

Wißkirchen, Hans［1999］: *Die Familie Mann*. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt)

e-references

1900年頃のブルックリン橋　https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Brooklyn_Bridge_railroad.jpg

エイドリアン（衣装デザイナー）　https://en.wikipedia.org/wiki/Adrian_(costume_designer)

ジェイコブ･グールド・シュールマンに関するハイデルベルク大学の報道記事 (Wie Jacob Gould Schurman der Ruperto Carola ein neues Hörsaalgebäude spendierte)　https://www.uni-heidelberg.de/presse/news09/pm290209-3gesch.html